◎国選択指定
無形文化財
「横山盆踊」

上西だより
～上西集落支援員だより～

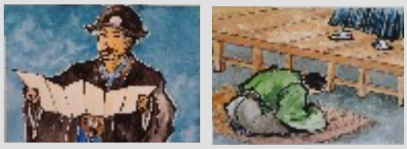
西之表市地域支援課
上西集落支援員
馬場 信一　編集
連絡先090－9579-3953
上西校区長責任発行

毎年７月第２日曜日の夜、「横山盆踊」が行われます。約500年前に京から種子島に伝えられたこの盆踊りは、所作がきわめて静かで荘重です。この芸能には盆踊りらしく先祖の霊に畏敬の念が込められており、室町時代の雰囲気が偲ばれます。

時は流れて江戸時代初期、島津藩家老比志島國隆（ひしじまくにたか）が悪政をなしたという理由で種子島に遠島にされます。愛妾千代女（ちよじょ）は彼の後を追い、二人は横山で生活します。この二人の行動は悲劇を招き、結末は見る者の涙をさそいます。（以上参考資料：下野敏見氏文献より）

紙芝居『横山 盆の舞語り（あらすじ）』
～千代女と國隆を見守る横山の人々～

ヒメヒオウギズイセン



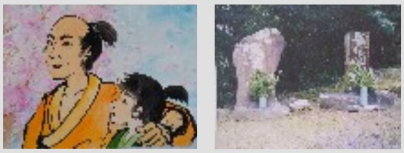
「おもてを上げい。比志島國隆（ひしじまくにたか）、そなたを種子島へ遠島といたす。」
「ははっ。」 島津藩日向国（ひゅうがのくに）家老である比志島國隆の遠島は悪政をなしたとの理由でした。

阿久根の地で愛妾として生活していた千代女は、愛する國隆の遠島の知らせを聞き、ひとり種子島に渡りました。國隆様に逢いたい一心でたどり着いた島では親切な漁師に助けられ、國隆の居る横山へ。

國隆は子どもたちに学問を教えました。千代女は地元の人々と交わりながら、ともに平穏に暮らしていたのでした。 しかし、幸せは長くは続きませんでした。

千代女が種子島に渡り、國隆と暮らしていることが藩に知られ、國隆は切腹を命じられます。罪を償う気がなく、かつての女と遊び暮らしているというのです 。
横山の人々は嘆き、悲しみます。

「これまでの千代との横山での暮らし、楽しかったぞ。」
「國隆様、もったいないお言葉。國隆様おられぬこの世では千代は死んだも同じこと。ぜひ、ご一緒しとうございます。 さ、ひと思いに。」
「千代」と、國隆は小太刀で千代を…。



「横山の皆々様、感謝いたす。」の言葉の後に切腹するのでした。
介錯（かいしゃく）する使者の目は涙でかすみ、「御免」と一振り。 ・・・幼い子が「國隆さまと千代女さまは、どあんなったと？」とたずねると、父は「…幸せになったとや。」と静かにこたえるのでした。

寛永五（1628）年 の秋深きころでした。二人の亡き後、横山の人々はその死を深く悲しみ、満徳寺（今の横山神社）の境内に墓碑を建て、二人の魂を手厚く祀（まつ）ったのです。

想いは今も受け継がれ、二人の霊をなぐさめるために「横山盆踊」が毎年七月、しめやかに舞われるのです。（※今年は中止）今年は千代女と國隆の没後393年目にあたります。